

子育て期における母親のエスノグラフィー — 養育者の気づきから見えてくる支援のあり方 —

学校教育学専攻
幼年教育コース

M09027D

服巻真須美

【問題と研究の目的】

子育て期の養育者をとりまく環境は、日毎に変化をしている。子育て支援が盛んに言われ、子どもの虐待や、育児不安等が問題視されるようになったことで、養育者の負担感や、不安感を解消すべく、様々な角度からよりよい子育てのあり方が考えられてきている。そのなかでも、特に今日我が国において養育の中心的な役割を担う母親についての研究は、これまでも多くなされてきている。特に、母親の子育てに対する負担感の高さは、これまでの研究でも立証されている。

そうした負担感の軽減のために、母親同士をつなぐ支援の場の必要性も指摘されており、保育職が、そのような場で、子育てをしている母親について正しく理解をし、地域の子どもや母親を支援していく必要があることも求められている。また、そうした場で出会う仲間として、「ママ友」が挙げられる。「ママ友」は、子どもを介して知り合う同志であり、子育て期の母親にとって様々に機能していることが考えられる。

また、母親の子育て能力の低下は、様々な場面で懸念されているところである。母親が、子育てについて、成長を遂げていくためには、自身がそのおかれている状況や、子どもの成長にとって譲れない事象に気づくという母親自身の省察が重要になってくるのではないかと考えられる。

これまでも、母親の認知発達についての研究

は行われてきた。しかし、これまでなされてきている統計的手法を用いた研究では、母親自身の気質やそれまで自らが育ってきた経緯の詳細までは捉えることができない。そのため、個々の母親の子育てを知ろうとするならば、子育ての背景を探ることができるような質的研究が必要であると考えられる。

そこで本研究では、母親の気づきと取り巻く支援のあり方について調べる質的研究を行い、養育者である母親が、プラスの面も含めてどのように自らの子育てを認知して、どのように成長していこうとするのかを、ママ友の関係性にも着目し、明らかにする。さらに、保育職がその子育ての支援に介入していこうとする際に、子育て期の母親をどのように支援していくことがふさわしいか、保育職の専門性がどう活かされるかを、検討していくことを目的とする。

【調査の対象と方法】

今回の調査では、当事者である調査者自身の育児記録および、機縁法により依頼した子育て中の母親のインタビューから分析をする。インタビューは、2名から4名のグループインタビューを基本とし、4名には個別インタビューを実施した。調査者の育児記録は2010年6月～2010年8月のものである。インタビュー調査の期間は2011年2月～2011年10月である。内容については、個別インタビュー、グループインタビュー共にインフォーマルに近い形で語りを聴いた。会話が途切れた際には、質問項目を準

備し、会話に参加した。会話の全体は、対象者の了解を得て、録音をした。録音された内容は逐語録とし、コード化、整理をした上で概念化し、さらにその概念を研究目的に照らして整理した。

当事者が研究をするということについては、意義と困難さを伴う。そのため、分析をする際には、インフォーマントの語りを「私」の視点に安易にあてはめず、相対的かつ客観的に捉えるよう、配慮をした。

【結果と考察】

育児記録とインタビューから、養育者である母親の気づきに焦点をあて、保育職がその子育ての支援に介入していこうとする際に、子育て期の母親をどのように支援していくことがふさわしいのかを検討した。保育職の専門性を生かした、子育て期の母親への支援のあり方についてみてきた知見を以下にまとめる。

まず、第一に子育てをしている母親個人の支援を考えるだけではなく、母親の同僚性の構築にむけた支援を考える必要がある。本調査でそのメリットが示唆された母親同士の支え合いの良さを活かせるよう、さらにそれを支えるという立ち位置でいることが求められているだろう。そしてその空間は、自分がここにいてよいのだと思える空間であるよう、配慮することも求められるだろう。

第二に、支援される母親にとって有効だと思われる人が有効な支援をするということである。母親仲間や、夫、親などではなく、保育職等の専門家のほうが、耳を傾けやすい内容の相談事などもある。母親がより専門的な知識を求めてきたとき、専門の知識を示唆するだけではなく、母親自身が持つ子育てのゆらぎにつきあいながらふさわしいアドバイスをすることと、その中

でも母親が必要な支えを精査していく力をつけるための支援と、情報を自分からアンテナを張って得ようとしていく力とつけるための支援が必要になるだろう。そのためには、その窓口の敷居を低くしておく必要があるだろうと思われる。本調査で示唆されたように、セミナーや検診など、全ての母親を対象とする場面で、必ず時間を作るということも有効に働くことが考えられる。

第三に、各々の母親の置かれている状況を理解し、肯定的に捉える姿勢を持つことである。母親がしている子育てを、正しく導くという観点ではなく、母親が信頼をして、有効な人へとならなければ、支援をする側がいくら熱心に働きかけても支援を受ける側が気づけなければよりよい支援にはつながらない。

母親をまずは肯定的に捉え、それぞれの母親が置かれている状況に納得しているかという、個々の価値観を重視し、母親が有効な人を見つける力を付けられるように支え、その有効な人と互いに支え合う、個ではない集団の支援をしていく視点を持つことが支援者として求められていると示唆された。

本研究の限界としては、本研究の機縁法を用いた対象者には偏りがあるため、外部からの視点も必要であったと言えるだろう。また、考察は、筆者自身の立場から集約した論旨の展開になっていることは否めない。まずは、ママ友の特性を正しく理解し、その上で保育職者ができることを探究するべきであったといえるだろう。この点をさらに探究していくことも今後の課題としたい。

主任指導教員 名須川知子
指導教員 名須川知子